

社会的実践としての日常会話 ——電話会話の終了に関わるプラクティスを例に——¹

高木 智世

1. はじめに

本稿の題目にも「日常会話」という言葉を用いたが、なぜ日常会話が研究の対象となりうるのか、また、なぜ、日常会話の組織を緻密に見ることが重要なのか、まずはこのことについて述べておきたい。答えは実は簡単である。社会の基盤の大部分は会話を通して築かれているからである。即座に、教育、政治、ビジネスなど世の中の重大なことはほとんど制度的な場面で決定されるのではないかという反論が返ってくるであろう。その通りかもしれない。しかし、私たちは、皆、まずは周りの大人や仲間との日常的な会話に参加することを通して言語そしてコミュニケーション能力を獲得する。制度的な場面での相互行為が可能なのは、日常会話への参加を通して得たコミュニケーション能力の基盤があってこそなのである。教育や政治やビジネスの社会的活動の場面にしても、制度的な状況で取り決められることは、それ以外の日常的な対面相互行為を通して取り決められることのごく一部であろう²。さらに、個人のレベルにおいて極めて重要な意味を持つ人間関係も、会話を通して築かれる。そして、このように社会構造の根幹ともいえる日常会話は、すべて具体的な実践的文脈で生起する。いや、それは、むしろ具体的実践そのものである。その具体的実践の組織を緻密に分析することを通して見えてくるのは、社会の基盤の総体を構成する無数の「細胞」のうちの一つがどのような構造になっているかということかもしれない。しかし、細胞から構成される有機体がどのような成り立ちになっているかを理解するためにまずは細胞の構造を知ろうとすることは、決して無謀な試みではない。

日常会話の研究は、Harvey Sacks, Emanuel Schegloff, Gail Jeffersonらアメリカの社会学者が中心となって創始した会話分析 (Conversation Analysis) の発展と共に英語以外の言語においても盛んになっている。日本語についても、一見雑然ととりとめもなく行われているように思われる日常的な「おしゃべり」も、非常に緻密なレベルで秩序が維持され、社会的相互行為として組織されているという事実が、日本語会話分析研究者によって実証的に明らかにされ始めている。本稿では、そうした一連の研究の流れに沿って、日常的な電話の会話の特に終了部分に焦点を当て、日本語において「電話の会話を終わらせること」がいかに相互行為として組み立てられているか、という問題について考える。

日本語の電話の終結部についてはすでにある程度研究が進められているが、終結

部の談話構造パターンを提示するものや、終結部に用いられる言語表現を他言語と比較するものがほとんどである（岡本 1990、小野寺 1992、岡本・吉野 1997、羽井佐 1998）。こうした研究は言語使用と文化的規範との関連を示唆する興味深い観察を提示しているが、本稿では、言語使用のあり方そのものが規範性を有する社会的行為を構成し、その規範性が会話者相互の理解の基盤となり、相互行為の組織を可能とするものであると考える。本研究のために集められた電話の終結部の事例の一つ一つが、会話者自身が日本語使用場面において社会的能力のある人間としてふるまい、「いま、ここで、この電話の会話を適切に終了させる」という具体的課題を達成する実践である。それぞれの具体的状況に埋め込まれた相互行為の組織され方をつぶさに見ていくことによって、電話というメディアを通しての音声のやりとりが現実社会の具体的実践として構成されるメカニズムを明らかにしていきたい。

2. 会話の終結

およそ 30 年前、「会話」を社会学の重要な研究対象として取り上げ、社会的相互行為として会話がどのように組織されているかを実証的に解明していく手法を開発した Sacks、Schegloff、Jefferson は、会話の順番取りシステム (Sacks et al, 1974)、会話の開始部 (Schegloff, 1972)、会話の終結部 (Schegloff and Sacks, 1973) を分析した論文を初めとして研究成果を次々に発表した。これらの論文において提示された知見はその後に続く会話分析的研究の分析の道具として欠かせないものとして現在に至っている³。ここではその中でも特に本稿で用いる重要な概念について簡単に解説しておきたい。

2.1. 会話の順番取りシステム

先にも触れたように、一見とりとめもなく進んでいくように思われる会話は実は隅々まで相互行為的に組織されて (organized) いる。一つ一つの発話の構築のされ方からちょっとした言いよどみや言いなおし、沈黙など従来の言語学的研究などでは周辺的な扱いを受けてきた現象まで、いかに会話の組織化に深く関わっているかが会話分析的研究によって次々に明らかにされている。会話の組織化の根幹を成すのが順番取りシステムである。順番 (ターン)⁴を替わりながら話す、ということがなぜそれほど重要な意味をもってくるのであろうか。「順番を替わりながら話す」という事態は、実はそれほど単純ではない。Sacks たちは、日常会話は 2 つの基本的な特徴を有するとしている。その 2 つの基本的特徴とは、1) 一度に一人が話す、そして、2) 話し手は何度も交替する、ということである。1) について言えば、一人より多くても (複数の人間が一度に話している状態) 少なくとも (誰も話していない状態) 具合が悪い。もちろん、実際の会話では、沈黙が生じることも複数の人の発話が重なることもいく

らでもある。しかし、会話の参加者はできるだけそうした事態を避けるように志向する。一度に一人の人が話している部分が沈黙や発話の重なりがある部分に比べて圧倒的に多いことは実際にその時間を計測して比較してみるまでもなからう。それは、基本的に順番の交替がスムーズに行われ、沈黙や発話の重なりが出来るだけ速やかに解消されるようなシステムの存在を示唆している。2) については、日常会話では各参加者が話す順序や話す長さなどは予め決まっているわけではなく、当の参加者たちが局所的に決定していくのである。より制度的な場面を考えてみよう。例えば、講演会では基本的に順番の交替は生じない。討論会では司会者によって順番が割り当てられるであろうし、ディベートの場合には予め順番が決められている。これに対し、日常会話においては、参加者の誰もが何度も順番を取れるし、誰がいつ順番を取るかということは事前に決められているわけでもない。全ては、参加者自身によってその時その場で決められていくのである。順番交替は繰り返し何度も行われ、しかもそれは無秩序に行われているわけではない。ならば、そこに何らかの「システム」が存在しているはずである。つまり、順番取りのシステムとは、誰が次の話者となり、いつ次の話者への移行が起こるべきかということについて、参加者自身が、参加者の属性や会話の内容や場面等に関係なく、相互に状況を確認しあいながら局所的に取り決めていくための手続きである⁵。さらに、沈黙や発話の重なりが最小限となるようにするためには現在の順番と次の順番がスムーズに連結されていく必要がある。そのためには、現在の聞き手が現在の話し手の順番が終わり次の順番への移行が適切となる場に至る前にその時点がいつくるかをシステムティックに予測できるように、順番が組織されていないなければならない。順番の単位はそうした予測を可能とするものであるはずなのだ⁶。

さて、一旦会話が始まれば順番取りシステムが作動すると、順番の移行が適切となる場が次々に、原理的には無限に、生成され、会話は永遠に会話が続けることになってしまう。つまり、順番取りシステム自体には、自らシステムを停止するための装置は組み込まれていない。一方的に突然話すのを止めてしまうという方法は実際にはほとんど用いられていないし、もし、そのような方法を用いた場合には「異常」な事態としてさまざまな解釈を引き起こし、単純に「会話が終了した」事態としては知覚されないであろう。ならば、会話を終わらせたい会話者にとっては、いかに、一人の話し手の順番が完了した時に別の話し手が話し始めるのが適切となるという事態を引き起こさないような（つまり誰も話していないという事態が、誰かが話していない、沈黙している、事態として理解されることがないような）時点で協同で同時に到達するか、というのが実践的な問題となる。「相互」行為はそもそも発話連鎖として実現され、会話の終結も協同で相互行為的に達成されるとすれば、この問題への解決策の一部は、相互に、会話を終了することに対する了解を示す発話を交換することにある。これを

最終交換 (terminal exchange) と呼ぶことにする (Schegloff and Sacks, 1973)。最終交換は、例えば、

A : バイバイ。

B : バイバイ。

というように、一対の発話連鎖として実現される。このように対をなす連鎖は、最終交換だけではない。それどころか、発話連鎖の組織は対として構成される連鎖「隣接対」を基本単位とし、最終交換は隣接対の一種に過ぎないのである。2.2. ではこの隣接対の基本的な特徴について概説する。

2.2. 隣接対

Schegloff and Sacks (1973) は次のような隣接対の特徴を挙げている。

- 1) 二つの発話からなる。
- 2) この構成要素としての二つの発話は隣接して配置される。
- 3) それぞれの発話を別々の話者がつくりだす。
- 4) 二つの発話は第一成分と第二成分という順序付けがなされている。
- 5) 第一成分は特定のタイプの第二成分が来ることを適切とする。

そして、各会話参加者が「第一成分が産出されたならば、その最初の可能な完結点（最初に発話の移行が適切となりうる場）で、次の話し手は同じ連鎖タイプに属する第二成分を開始するべきである。」という規範に志向することによって、隣接対を基本単位として発話連鎖が組織されていくのである。「バイバイ」「バイバイ」という最終交換の例で考えてみると、この最終交換は別々の話者によって発せられる二つの発話からなり、第一成分として「バイバイ」が発せられれば、その発話が完結した時点で受け手は「バイバイ」という第一成分が属する連鎖タイプ（「最終交換連鎖タイプ」とでも呼ぶことができようか）に属する第二成分を選択して開始することが適切となる。最終交換は、会話を終わらせるという目的に特化した隣接対であり、概して第一成分と第二成分で同じ言語形式が用いられる、第二成分が産出された後は順番の移行が生じないことが適切となる、といったような点において、特殊である。より一般的な例を用いてみよう。「今何時?」という発話が第一成分として生じた場合、「質問—応答連鎖タイプ」から応答に属するものとして聞くことができるような、例えば、「10時。」という第二成分が適切となる。この質問と応答のやり取りは、第一成分が質問、第二成分が応答、という順序付けがあり、応答が質問の前に来ることはない。また、「今

何時？」に対して、別の、例えば「依頼-受諾連鎖タイプ」に属する第二成分「いいよ。」が来ることもない。(そういうことが生じたとすれば、「今何時？」という発話が「依頼」と理解できるような極めて特殊なコンテキストがつけられているか、そうでなければ、規範の逸脱と解釈され、その理由説明が要求されるであろう。)

隣接対の第一成分と第二成分が上のような条件で近接して結び付けられ、第一成分が生じれば、「次」の順番でそれに対応する第二成分が生じることが適切となり、期待され、予期される。これは、会話者が会話を組織するのに用いる実践的方法なのである。2.1. で述べたように、順番取りシステムは順番ごとに局所的に作動するため、次の順番において意図した類の発話が生じなければ、その後の順番でそれが生じる保証は何もない。順番取りシステムそのものは、ある程度意図した発話を意図した時点で生じさせて会話の流れを作ることについては、関与しない。次の順番で意図するタイプの発話が生じる確実性のある程度コントロールする隣接対が、それを可能にする手立てなのである。

しかし、会話を終結するのになぜ隣接「対」が必要なのか、2.1. の終わりでも簡単に触れたが、このことについてもう一度確認しておきたい。発話が対となって、第一成分に結び付けられる第二成分があるからこそ次のことが可能になる。つまり、第二成分の話者は第一成分をどのように理解したかを示すことができ、第一成分の話者は自分の発話が意図したように理解されたか、また、それが受け入れられたか否かを確認することができるのである。また、第二成分がくる位置は、次話者が第一成分の発話が理解できなかったことを主張する機会でもある。さらに、第一成分の話者は第二成分の話者が実は自分の発話を誤解していることを、その次の順番で主張することができる。このように隣接対は会話を組織していく中で問主観性を保証する装置でもあるのだ。以上のことを踏まえると、最終交換について次のようなことがいえる。最終交換の第一成分が、第二成分の生起をもって順番取りシステムを停止することを提起するものであるとすれば、最終交換第二成分の生起は話者がその提起を理解し、同意したことを明らかにするのである。よって、先に挙げた「いかに一人の話し手の順番が完了した時に別の話し手が話し始めるのが適切となるという事態を引き起こさないような時点で協同で同時に到達するか」という問題が部分的に解決されることになる。

2.3. 終結部

最終交換を用いることは、しかし、部分的な解決にしかならない。私たちは、会話中いつでも最終交換の第一成分を発することができるわけではないことを経験的に知っている。最終交換の第一成分を発することが可能な位置についてはまだ何も説明されていないのだ。

Schegloff and Sacks (1973) が提示した解決策は次のようなものである。最終交換

の第一成分は、隣接対の第二成分が第一成分の生起を機に配置されるような局所的な関連付けで直前のターンに結び付けられているわけではない。そうではなく、適切に開始された終結 (closing section) を基準に配置されているのである。会話者のどちらかが一方的に会話を打ち切るという事態を避けて、協同で会話を終了させるには、お互いにそれ以上「言いたいこと／言うべきこと (mentionable)」がないということを確認し合いながら、もしまだ「言いたいこと／言うべきこと」があるのならそれを言う機会を与え合いながら終了に至るのが最善であろう。そうした作業の場として用意されているのが終結部である。終結部では、これ以上言いたいことはないということを示すために、「うん」や「はい」など、順番をパスするためだけに用いられ、新しい情報を含まない表現を会話者が交互に繰り返すといった事態が見られる。もちろん終結部は「言いそびれたこと (unmentioned mentionable)」があればそれを持ち出す機会を確保するための場でもあるため、3節以下で具体的に示していくように、終結部で新たにトピックが導入されることもある。そのトピック導入をきっかけにまた発話連鎖が長々と展開されることさえありうる。

では、終結部が適切に開始されるのはどのようにしてか、という問題がまだ残っている。終結部は、終結にさきがけて発せられるという意味を含めて「前駆終結 (pre-closing)」と呼ばれる行為によって開始される。前駆終結は、現在のトピックについての話を終了し、終結部を開始することの提案でもあり、「言いそびれたこと」があれば言うように誘う行為でもある。いずれにせよ、「提案」や「誘い」は、受け入れられる場合も受け入れられない場合もあるので、前駆終結は、精確には、「前駆終結になりうるもの」と考えるべきである。また、前駆終結は会話者があるトピックについての話が終了したと認識しうる時点で配置されることによって初めて前駆終結として働く。さらに、前駆終結として用いられる表現が予め決まっているわけではない。その意味においても、「前駆終結となりうるもの」という捉えかたの方がより精確である。Schegloff and Sacks (1973) は英語会話においては、あるトピックについての話が終了したと認識される時点で単独で現れる (つまり、それだけでターンを構成する) "O.K." や "we-ll" が前駆終結となりうるとしている。日本語においては、発話連鎖の然るべき位置で前駆終結として用いられうる "O.K." や "we-ll" に相当する表現形式が用意されていないように思われる⁷。もっとも、日本語会話では「じゃ」⁸ が前駆終結となることを指摘する研究もあり (3.2. 参照)、その指摘は事実の一部を捉えているように思う。しかし、3.2. と 3.3. で詳しく論じるように、この観察はより精緻化される必要がある。

日本語会話の終了の組織全般を論じるのは、さらに多くのデータを集めて分析を進める必要があるため、別の機会に譲る。本稿では、英語会話における終結部の特徴の一つである「透過性」を示す現象と同様の現象が日本語でも見られることを確認し、

会話の終了が志向されつつ、最終交換の達成が遅延されている事態に焦点を当てる。

3. 日本語における電話会話の終了

3.1. 終結部の「透過性」

Schegloff and Sacks (1973) は終結部に入ってからもあるトピックについての話が開始され、展開される可能性があることを論じている。そもそも、前駆終結は、潜在的に、受け手が未だ取り上げられていないトピックがあればそれを持ち出す機会を供する行為でもあった。受け手がその機会を利用するとなれば、そこから新たなトピックについての話が場合によっては長々と続き、終結部の開始は遅延される。新たなトピックについての話が展開すれば、それに伴って「自然な流れ」でさらに新たなトピックが導入されることもありうる。また、それより前の部分で話された内容を資源として前駆終結を開始した場合、それが新たなトピックを提供する契機となる可能性もある。つまり、会話の終了は常に「前駆終結→最終交換」という形で「無駄なく」実現されるわけではなく、むしろ、最初の前駆終結の提示から終結部の開始の間、終結部の開始から最終交換の間、そして、最終交換に入ってからでさえも、様々なやりとりがなされ、新たなトピックが導入される可能性を許すように会話の終了は組織されているというのである。日本語電話会話の終了についても、こうした終結部の「透過性」と同様の特徴が見られる。例えば、次の例では、Bがすでに最終交換の第一部分「ばいばい。」を発しているにもかかわらず、Aは、この断片の部分の少し前でBに依頼したキャンプの計画を立てることについての言及を続けている。

(1) [キャンプ]

- 1 A: まあ [;
- 2 B: [うん
- 3 A: n- 今度 (0.5) 大阪い↑こう (.) 中間や [がな,
- 4 B: [あ:ん
- 5 (.)
- 6 B: ehhhhhhhh [hh
- 7 A: [宮崎と: こっちの: (1.0) いばら [き
- 8 B: [うんや: ね: 。
- 9 B: う: [ん
- 10 A: [う: [:ん
- 11 B: [またいこうやそし [たら
- 12 A: [(° まあ°) [° あ: ° じゃあ、後でメールする =
- 13 B: [()

- 14 A : = <帰って>くる前にまた連絡するわ : :
- 15 B : うん、わかった。
- 16 A : [うん
- 17 B : [は : : : い、
- 18 → A : [じゃ、なんか (.) よさそうな [ところがあったら =
- 19 B : [ばいば : : : い [え ?
- 20 → A : = さがしちよって hhhhhhh
- 21 B : ehh よさそうなところ [ろ hh って hhh な hh に hhhhhhhhhh
- 22 A : [hhhh hhhhhhhhhhhhhhhhh

これは茨城在住の A が宮崎在住の B にかけて電話である。断片冒頭部分は B が A と B の共通の友人を訪ねて大阪へ遊びに行くことについての話の続きである。その話が終結した時点で発せられる 12・14 行目の A の発話は、この電話の後自ら接触することを申し出る内容からも、前駆終結と聞くことができる⁹。それに応じる B の 15 行目の発話によって終結部の開始が確立され、16 行目・17 行目は重なってはいるが、互いに発話順番をパスし、これ以上話すべきトピックはない事を示している。それを踏まえて B は早速 19 行目で最終交換の第一成分を発したわけであるが、そのターンの開始と同時に、A は、再び、キャンプのために「よさそうなところ」を探すことを依頼する発話を始める (18 行目)。18・20 行目の A の発話と 19 行目の B の発話は、前駆終結 (終結部開始の提起) に受け手が応じ、終結部が開始した直後、会話者が示す志向の可能性を示している。すなわち、B のように即座に最終交換を開始することも可能であり、A のようにすでに話されたことを素材としてさらに発話連鎖を続けることも可能である。最終交換の第一成分が発せられても、それに応じる最終交換の第二成分が発せられない限り終結部は引き伸ばされる。そして、この断片においては、18・20 行目の A の発話に対し、21 行目にあるように B が応じることによって、19 行目の最終交換の第一成分を発することによって為された会話の終了の提起は一旦保留となり、終結部が引き伸ばされる結果となったわけである。このように、会話者は相互に相手の (発話を含めた) 行為に対して自分の行為を順応させながら協同で発話連鎖を構築していく。

これまでの多くの研究がそうであったように、電話終結部の基本的「構造」や「パターン」を仮定し、様々な社会文化的条件によって基本構造に変形が加えられたり、例外が生じたりする、という視点のみでは、相互行為において不可避的に存在する「相手次第」という偶発的産物としての行為連鎖の展開を捉えることはできない。会話者は、研究者が何らかの手法によって抽出した「構造」や「パターン」に志向しているわけではない。あくまでも現に会話が生じているその実践的状況の具体的な文脈に志向し

ているのである。

さて、Schegloff and Sacks (1973) は（その電話会話において）前に話されたたことを再度持ち出すこと（reinvocation of earlier talked-about materials）が終結部内で生じ得るし、場合によっては終結部開始を提起する前駆終結において用いられるとしている。一旦そうした「使用済み」の素材を再利用したトピックが導入されれば、それが契機となって他の新たなトピックが展開する可能性もある。断片（1）のAはBによって発せられた最終交換の第一成分を無効にすることによって、その時点での会話の終了を阻止する形となり、結果としてさらに終結部が続いた。しかし、それを契機にこの後さらに新たなトピックが導入されることはなく、20数秒後にこの電話の会話は終了に至る。

3.2. 前駆終結ターンにおける「じゃ（あ）」

以下、トピックが導入されることによって会話の終了が遅延されている事例を幾つか見ていくことを通して、会話者が相互の行為に敏感に対応し、会話が「終わりそうで終わらない」事態をつくりあげつつも会話を終了させることへの志向を示していることを明らかにしていきたい。しかし、その前に、上の（1）においても12行目と18行目に見られる終結部における「じゃ」というターンの開始の仕方について確認しておきたい。

日本語の電話会話の終結部に「じゃ」が頻出することはすでに幾つかの研究において報告されている（岡本1990、小野寺1992、熊取谷1992、岡本・吉野1997）。筆者の手元にある電話会話のデータでも、終結部において「じゃ」の使用が認められる事例が多いことは間違いない。熊取谷（1992）は、「じゃ」は「現行発話交換を中断させ新たな発話交換を先導する力を持つことから、『後方指向』の区切りをつけることをその談話機能として持っている」としている。また、このことから、「じゃ」は電話会話の終結においては、「前段終結へのあるいは最終発話交換への移行を表示することが多い」¹⁰としている。

(2) [熊取谷 (1992)]¹¹

A1: じゃ、

 「また、今度な。木曜日か。

B1: | うん、ゲロマブに会う日じゃ。

A2: ♪ わあ、いいじゃあ。

B2: じゃ、

 「バイバイ

A3: ♪ うん、バイバイ。

(2) は熊取谷 (1992) からの例であるが、これについて、A1 の「じゃ」は A2 までの「発話交換 (必ずしも隣接対でなくともよい)」を先導し、B2 の「じゃ」は先行部分の継続可能なやりとりを中断し、最終交換を先導している、という分析が提示されている。ここでは、会話分析の基本的な概念であり、Schegloff (1995) において詳細に論じられている連鎖組織の考え方をういた分析を提示したい。2 節では、連鎖構造の基本単位は隣接対であることを説明した。この隣接対が基本連鎖を構成し、基本連鎖に至る準備段階として組織される連鎖が拡張されることを先行拡張 (pre-expansion)、対になっている基本連鎖の間に挿入されることによって連鎖が拡張されることを挿入拡張 (insert-expansion)、基本連鎖の後が拡張されることを後続拡張 (post-expansion) と呼ぶ。これらの連鎖の拡張は、単に基本連鎖となる隣接対に対してどの位置にあるかということで決められるわけではなく、基本連鎖が行為連鎖全体の基部であり、拡張は文字通りその基部の拡張であることが会話者間で相互に認識できるように組織されているのである。例えば「今週末あいてる？」という言い方によって、それが第一成分に依頼もしくは誘いの行為がなされる基本連鎖の先行拡張であることが理解できる。そして、受け手はその理解に沿って自らの行為を組織することができるのである¹²。

さて、「じゃ」に話を戻したい。「じゃ」が発話連鎖および発話順番 (ターン) 中のどの位置で用いられるかということに注目すると、電話会話の終了部分において前駆終結や最終交換を導くとされている「じゃ」は基本連鎖隣接対の第一成分の開始部分に配置されていることがわかる。すなわち、基本連鎖隣接対の開始を標示しているといえる。上の (2) の例は、原典のトランスクリプト表記の精度の範囲で判断すると、次のように考えることができる。

(2)' [熊取谷 (1992)]

A1: じゃ、また、今度な。木曜日か。[基本連鎖隣接対第一成分]

B1: うん、ゲロマブに会う日じゃ。[基本連鎖隣接対第二成分]

A2: わあ、いいじゃあ。[終了のための第三成分]¹³

B2: じゃ、バイバイ [基本連鎖 (最終交換) 隣接対第一成分]

A3: うん、バイバイ。[基本連鎖 (最終交換) 隣接対第二成分]

A1 冒頭の「じゃ」によって開始される隣接対も、B2 冒頭の「じゃ」によって開始される隣接対 (最終交換) も、何か別の連鎖に寄生しているようなデザインにはなっていない。それぞれに基本連鎖隣接対の第一成分を構成している。ここで重要なのは「じゃ」で導かれる第一成分は、直前のターンに接続しておらず、発話連鎖においてある種の断絶が認められるということである¹⁴。

基本連鎖の第一成分であっても、明らかにあるトピックについての話が継続している時点で生起し、前駆終結と聞くことができないような発話が「じゃ」によって導かれている場合もある。その際「じゃ」は現ターンを直前のターンに結び付けるものとして用いられている。

(3) [梨]

- 1 H: だから [:.hhh
 2 Y: [うん たしかん: だった-そのく-でもく:に:に::
 3 ぐらいたった> ようなき: いやか-あ: たし [:あのあれは::
 4 H: [本人にき-
 5 H: 書いてある?
 6 Y: 書いてh あhh° る °h [hh.
 7→H: [じゃ: 書いて: [書いたの ちょっと 見てくれる?
 8 Y: [あとでかい-
 9 Y: う: ん。

断片(3)は後に3.4.で示す断片(6)のあとに生じる部分であるが¹⁵、ここで7行目の発話は終結部開始を提起する前駆終結と聞くことはできない。断片(3)は、H(姉)がY(妹)の三女へ成人の祝儀を贈ることを申し出るが、以前に次女の成人の祝いに贈った額をYに尋ねている状況で生じたものである。5行目は7行目の依頼を志向した先行依頼(pre-request)である。この意味において、[依頼-受諾]の連鎖を構成する7行目と9行目は、5行目と6行目の先行拡張として生じた先行連鎖の基部となる基本連鎖である。7行目はこの基本連鎖の第一成分であるが、「じゃ」は直前の先行連鎖を踏まえて基本連鎖が導かれていることを標示している。

むろん、このような位置以外で用いられる「じゃ」もある。

(4) [梨]

- 1 H あのと: ちょきんばこ: [:?
 2 Y: [うん。
 3 H: 開けて [貯金箱の中身 .hh まで持ってたんよ ::=
 4 Y: [うん。
 5→Y: = あそう ::::: ほんつとに じゃ, gh- ほんつとに [すぐに
 6 H: [(せっぱつま-)
 7 Y: つかえる: [:ものを::,
 8 H: [そそそそ。

5行目のYの発話の開始部分「あ そう：：：：：」は直前のターンに対する反応であることを明らかにしており、ここでの「じゃ」は、その後続く部分が話者が先行発話内容を踏まえて自ら導き出した結論の提示であることを投射している。

いずれにしても上の(3)(4)では「じゃ」を含むターンはその直前の部分を踏まえて発話されたものとしてデザインされていたのに対して、「じゃ」が開始するターンが前駆終結として聞かれる場合は、あるトピックについての話が終了したとみなされる時点で、直前の部分に接続するものとしては理解されない基本連鎖第一成分が導かれている。

先に見た(1)の一部を再度以下に見てみよう。

(1)' [キャンプ]

9 B: う: [ん

10 A: [う: [:ん

11 B: [またいこうやそし [たら

12→A: [°まあ°) [°あ:°じゃあ、後でメールする=

13 B: [()

14 A: =<帰って>くる前にまた連絡するわ: :

15 B: うん、わかった。

12行目、Aの発話の冒頭部分はBの発話と重なっている上、声が小さいため聞き取りにくい、「じゃあ」の部分から音量が上がり、ターンの開始を明確に表示している。「じゃあ」によって導かれたのは、この電話の後の再接触を自ら開始することを申し出る発話であるが、これは直前の部分には接合していない。Aの12・14行目(14行目は12行目の言い直し、すなわち、自己修復である。)と15行目は[申し出-受け入れ]という、先行部分から独立した基本連鎖の隣接対を構成すると見ることができる¹⁶。先に見たとおり、BがAとBの共通の友人を訪ねて大阪へ遊びに行くことについての話は、9行目と10行目でAとBの双方が順番をパスすることによって終了が示唆され、Bの11行目の発話は、形式上は誘いとなっているが、それに対する応答(受諾もしくは拒否)が期待される誘いの「行為」としては扱われていない。11行目はむしろ話題となったことを総括するような内容によってそのトピックの終結を明確化する発話であろう。このような位置で生じる12・14行目のAの発話は前駆終結と聞くことができるのである。

これまで、「じゃ」に終結部を導く機能がある、といった言い方がなされてきた。これはより精確には次のように記述できよう。あるトピックについての話が終了したとみなされる時点で、局所的に直前の部分に接合しない、独立的な基本連鎖の隣接対

が「じゃ」によって開始される場合がある。その際、「じゃ」が、会話全体の「趣旨」を再確認したり、後の再接触について言及したり、会話全体を特徴付ける（「どうも」「ありがとう」「遅い時間すみませんでした」など）行為を導いているとすれば、すなわち、その電話の会話という出来事自体を何らかの形で意味づける行為を導いているとすれば、そのターンは、終結部開始の提起として聞かれる可能性がある。そのような「じゃ」は、それまで特定のトピックに沿って展開され、局所的に繋ぎ合わせられてきた発話連鎖からの断絶を標示し、会話の終了に向かうことを提案する。

3.3. 終結部開始後に用いられる「じゃ」

3.2. では「じゃ」で開始されるターンが前駆終結となりうる場合について、発話連鎖の組織という観点から検討した。しかし、そもそも、3.1. では、一旦終結部が開始されても、常に即座に最終交換に至るわけではなく、さまざまなやりとりがなされ、時には再び何らかのトピックが導入されて、そこからそのトピックについての話が展開したり、それを契機に新たに別のトピックが導入されたりすることによって、終結部が拡張される可能性について確認したのであった。ここでは、終結部の開始が一旦確立された後の位置において「じゃ」で開始される発話に注目して、一度開始された終結部がどのように引き伸ばされているかを見る。まずは、再び（1）の例に立ち返ってみたい

(1)' [キャンプ]

9 B: う: [ん

10 A: [う: [:ん

11 B: [またいこうやそし [たら

12 A: [°まあ°) [°あ: °じゃあ、後でメールする=

13 B: [()

14 A: =<帰って>くる前にまた連絡するわ::

15 B: うん、わかった。

16 A: [うん

17 B: [は: ::い、

18→A: [じゃ、なんか (.) よさそうな [ところがあつたら=

19 B: [ばいば: ::い [え?

20→A: =さがしちよって hhhhhhh

21 B: ehh よさそうなとこ [ろ hh って hhh な hh に hhhhhhhhhh

12・14行目が前駆終結として聞くことができることはすでに述べた。15行目ではそ

の終結部開始の提起が受け入れられる。16行目・17行目でA・B双方が同時に順番をパスし、さらにこれ以上話すことはないことを提示する。ところが、Aは18行目ですでに先にトピックとして取り上げられたキャンプの計画について再び言及する。このとき、やはり「じゃ」が用いられているのである。

次の(7)においても同じようなことが生じている。大学生で一人暮らしをしているH(息子)が実家のM(母親)にかけた電話である。会話を開始して間もなく、トランスクリプトの1行目に続いて地元の教員採用試験の問題集を探して欲しいという依頼の発話連鎖を展開する。

(5) [教採]

1 H: で: ちょっと聞きたいんやけど:

《中略》

2 M: 今うちで講師で試験受ける人がおるから [::

3 H: [あ ::

4 M: どこで買ったってきいてみてあげる。

5 H: はいはい、じゃ:一応(.) .h聞いて:で火曜日金沢行くんやったら:

6 M: うん

7 H: 探してみて:

8 M: ん、わかったよ。

9 (0.5)

10 H: はいは::い。

11 M: はい。

12 (.)

13 M: ほなね。

14 H: あっと:[:は:

15 M: [(はい)

16 (.)

17 M: ああそや。今年のね::

《中略》

18 M: ないわ(.) はい。

19 H: はい、わかりました、はい、わかりましたはいはいまあいいやいいや。

20 M: [()

21→H: [じゃとりあえず:(0.8) [それ、

22 M: [うん、はい。

23→H: あの:::ちょっと調べといてください。=お願いします。

24 M: はい。

25 H: .hhh はいはい。[ほな。

26 [(Mが受話器を置く音)]

1行目の連鎖開始のターンは、その後に話されることがこの電話の主たる目的として提示されるトピックであることを示すデザインとなっている。8行目でそのトピックが一旦終結する¹⁷。10行目・11行目で双方が順番をパスし、13行目でMは最終交換隣接対の第一成分を発している。しかしHはここで第二成分を返すことを拒否し、「あつと::は:」と「言いそびれたこと」がないか考えることをする。実際にこの時点でHが「言いそびれたこと」を思い起こそうと頭を働かせているかどうかは、検証不可能であり、また、会話分析の関心とはならない。重要なのは、この発話によって、会話の終結が先送りになり、そのことによって次の最終交換が開始されるまで会話者が「言いそびれたこと」を挿入する機会が拡張されたということである。実際、17行目でMのほうが「言いそびれたこと」を導入する。Mが導入したトピックに続いてHも「あ、あと::」と「言いそびれたこと」を持ち出し、出身校から記念式典の招待状が実家に届いていないか尋ねる。そのトピックについてのやりとりが、19行目で終了する¹⁸。その後、Hは、最初のトピックとして導入された教員採用試験の問題集を探して欲しいという依頼を21・23行目で再び持ち出すのである。このとき、やはり「じゃ」でターンを開始している。

ここで取り上げている「じゃ」で開始する発話は、先に前駆終結とみなされるターンで用いられている場合と基本的には同じ特徴を示している。(1)の18・20行目は直前のターンに接続しない隣接対の第一成分(依頼)を導いている。その依頼は、この電話の目的であった「Bにキャンプの計画を立てることに依頼」を繰り返しているのである。(5)の21・23行目も同様に、直前のターンとは断絶的にこの電話の目的であった依頼を繰り返し、隣接対第一成分を構成している。ともに、何か特定のトピックについての話が継続しているとはみなされない位置で生じている。つまり、これらの発話が終結部の開始を提起する前駆終結と解釈されるか、終結部内で生じていると解釈されるかは、発話連鎖上の相対的な位置関係によるもので、何らかの絶対的な基準によって判断されるものではない。2.3.で述べたように、英語会話においては、適切に配置されていれば“O.K.”や“we-ll”は強力に前駆終結の提示としての解釈を引き出す。これに対し、そのような表現形式が用意されていない日本語会話においては、終結部開始が確立したと認識できる時点が、英語会話で論じられているほどには明確ではない場合が多いことが予測される。今後実証的に検証する必要があるが、日本語会話では、「じゃ」やその他の標識を駆使して前駆終結として解釈されうる発話を複数積み重ねて、互いに互いの行為の理解を確認しながら終結部をつくりだして行くの

ではないだろうか。明確な前駆終結の生起を基点として終結部が組織されるというより、むしろ、最終交換への志向をちりばめた発話のやりとりを積み上げることを通して最終交換へ至る、という記述の仕方がより事実に近いのではないだろうか。

また、「じゃ」によって導かれる、その電話の会話という出来事自体を意味づける行為は、ここで見るように、その会話の目的や会話中に取り上げられたことに遡及的、遠隔的に結び付けられる事柄に言及することが多い。(1)の17・19行目の「じゃ、なんか(.)よさそうところがあつたらさがしちよってhhhhhh」は「探す」対象を「よさそうなところ」という言い方によって、限定的に述べていない。(5)の21・23行目「じゃとりあえず:(0.8)それ、あの:::ちょっと調べといてください。」においても、「調べる」対象が「それ」という代名詞で指示されている。こうした発話構築の仕方も、同一の会話内において既に取り上げられたことであり、それ以上特定の表現を用いずとも受け手が認識できるという前提に基づいていることを示している。こうしたターンは、それが結び付けられるトピックに立ち返ってそのトピックについての話を再び展開する機会を生み出す可能性を潜在的に含んでいる。会話を終了へ向かわせることが志向されている位置において、「じゃ」によって開始されるターンは、その電話の会話という出来事自体を意味づける行為を標示し、そうした行為がなされる位置であるという話者の理解を示すと同時に、「じゃ」によって遡及的に言及されるトピックに立ち返る機会を提供する。

日本語会話においても、会話の終了は参加者間で協同で構築され、その「透過性」が維持されていることが確認できたと思う。そして、日本語の「じゃ」はこうした側面にシステムティックに関わっていることを示すことができたかと思う。

3.4. 誤置標識で導入される新しいトピック

ここまででは「じゃ」で導入される発話がその会話の趣旨に遡及的・遠隔的に言及する場合を見た。以下で見えていくのは、その会話においては初めて言及される内容のトピックが、会話の終了が志向されている中で導入されている事例である。これらの事例では、「じゃ」以外の標識によって発話が有標化されている。

(6)は姉(H)妹(Y)が電話を開始して18分程度経過した時点からの断片である。この断片部分の直前では次に姉妹が会う日時についてのやりとりがあり、一行目の短いポーズはそのやりとりが収束した時点である。

(6) [梨]

1 (.)

2 Y: でま:ug-それは-梨のほう:のあれが;

3 H: [うん。

- 4 Y: [すむ話が?
 5 H: [うん
 6 Y: [はっきりい- (.) 買って来たっていうんがわかったら
 7 H: 電話する。=
 8 Y: =うん, 連絡くれれ [ば。
 9 H: [ああと一つ聞こうと思ってたんだけ [ど:、
 10 Y: [うん
 11 H: .hh あの: (1.0) お祝い。
 12 (1.0)
 13 Y: いい hhh よ hh [h そ h ん :hhh
 14 H: [い hhhhhhhh や h い: よじゃ h なくて

この電話はYからHにかけたものであるが、実は、その前日にHがYに電話をかけている。そのときはYが外出する直前だったので、後でYがかけ直すということで、簡単なやり取りのみで終えたという経緯がある。つまり、Hがかけてきた電話をYが返したという事態がこの電話会話である。この電話の最初の部分で、Hは、馴染みの梨の直売店にこれから梨を買いに行くつもりであることを伝え、Yを誘う。すなわち、そもそも最初にHがYにかけてきた電話の趣旨はそのことであったことがこの電話の冒頭で示されている。Yが、娘が帰省しているためHに一人で「行ってきて」と誘いを断ると、HはYの分も梨を買ってくることを申し出る。この梨についてのやりとりが終わると、全く別のトピックについての話が展開して十数分が経過する。そして、Yの「じゃ:hh あと: (.) なし: (.) やさんに行ってきたら: (.) 連絡くれる?」という、この電話の「趣旨」に立ち返るタイプの前駆終結として聞くことができる発話に続いて、上の断片に至る前に、次に二人が会う機会についてのやりとりがある。つまり、前駆終結の提示によって「自然な流れで」次に会う機会についてのかなり長い具体的なやりとりが生じたのである¹⁹。これは同時に再度終結部を開始して最終交換へつなげる作業の必要性も生み出し、上の例の2行目に始まるYのターンは再び終結部を開始する試みとしての前駆終結として聞くことができる。ところが、ここでもまた、前駆終結の提示は最終交換へ至らない。9・11行目でHが今度は全く別の新たなトピックを持ち出すのである。

Schegloff and Sacks (1973; 320) は、英語会話の終結部において新しいトピックが導入される場合について、次のような議論を展開している。そもそも前駆終結が前駆終結として受け止められ、終結部が開始される事態が、いずれの会話者もそれ以上話すことは無いということを踏まえているため、会話者は終結部では新たにトピックを導入するべきではないという志向性を示す。ゆえに、終結部で新たな事柄について

言及する場合にはすでに話されたことに何らかの形で関連付けるという方法が取られる。また、新たな事柄がそれ自体新たなトピックを為すものとして提示される場合、そうした志向性を示す標示が用いられるとしている。

- Caller^o : You don't know w- uh what that would be, how much it costs.
 Crandall : I would think probably, about twunty five dollars.
 Caller^o : Oh boy hehh hhh;
 Caller^o : Okay, thank you.
 Crandall : Okay dear.
 Caller^o : OH BY THE WAY. I'd just like tuh say thet uh, I *DO* like the new programming. I've been listening, it's uh // ()
 Crandall : *Good girl!*
 Crandall : Hey listen do me a favor wouldja write Mister Fairchild 'n tell im that, I think that'll s-shi break up his whole day for im.
 Caller^o : ehhh heh heh hhh!
 Crandall : Okay?
 Callero : Okay,
 Crandall : [Thank you.
 Callero : [bye bye,
 Crandall : Mm buh (h) bye.

上の例において、著者は6行目、Callerの"BY THE WAY"は誤置標識 (misplacement marker) であるとする。この標識を用いることによって、発話者は、終結部が新たなトピックを導入する場ではないという理解を示しているというのである。著者は特に取り上げていないが、同じ発話の冒頭の"OH"も同様の志向性を示していると思われる。ここでの"OH"は話者が何かを思い出したことを主張している。話者が事実とその瞬間にそのことを思い出したかどうかは確かめようがない。重要なのは、"OH"を発することがその瞬間における想起を「主張」ということである。この主張は、同時に、終結部に入る前にそのトピックを持ち出さなかったことの説明でもあり、会話の組織において現時点が本来そのようなトピックを持ち出すべきではない部分であることの理解も示していると言えよう。

Schegloffらは、また、誤置標識を用いる以外にも次のような方法によって同様の志向性が示されると論じている。すなわち、著者が対照標示 (contrast marking) と呼ぶもので、次のような例が挙げられている。

A : *No!* No. I don't mean that. I min- because uh, she en I'll prob'ly uh be spending the day togethuh, so uh ;; we'll go out tuh lunch, or something like that. hh So I mean if you;; have a cuppa cawfee or something, I mean // that uh that'll be fine. But // uh-

B : Yeah

B : Fine.

A : *Othuh* th'n that don't // uh

B : Fine.

A : Don't bothuh with anything else. I-hu H : ::

(1.2)

A : I-uh;; I *did* wanna tell you, en I didn" wanna tell you uh;; last night. Uh because you had entert-uh, company. I-I-I had something- *terrible* t'tell you. So//uh

Aの4つ目の発話における動詞の形式 "did wanna" と did にかかる強勢が対照標示である。Schegloff and Sacks (1973) によればこのような標示は、対照されている対の事柄のうち一つを強調することによって、明示的に述べられていないもう一方を喚起する。上の例で言えば、Aの最後の発話にある「言おうと思っ^ていた^んだけ^れども (I did wanna tell you)」という言い方によって、新しいトピックを持ち出す場ではないという認識に従った場合が対照的に喚起される。すなわち、話者は、そうした終結部の適切さへの志向性を示しているということになる。

さて、断片(6)に戻ろう。実はこの会話の終結部がどこから始まっているのかは、上の英語の(特に最初の)例ほどには明確ではない。

(6)' [梨]

1 (.)

2 Y : でま : ug- それは - 梨のほう : のあれが ;

3 H : [うん。

4 Y : [すむ話が?

5 H : [うん

6 Y : [はっきりい - (.) 買って来たっていうんがわかったら

7 H : 電話する。 =

8 Y : = うん , 連絡くれれ [ば。

9 H : [ああと一つ聞こうと思ってたんだけ [ど : 、

この断片に至るまでの経緯と2行目から6行目に至るYの発話が終結部の開始を提起する前駆終結と聞くことができることを先に説明した。7行目は、Yが発話を完結する前に発することによって、この電話の終了後にHから再び連絡することを求めている発話であるという理解を自ら提示し、8行目はその理解に対してYが確認を与えている。つまり、[終結部開始の提起—受諾／拒否]という隣接対を構成する前駆終結の第一成分自体が二人の会話参加者によって協同でつくられていると言えよう。この直後に発せられる9行目において新たにトピックが導入されている。それはすなわち終結部開始の提起に対する拒否でもある。この意味において、9行目の発話は、明確に終結部の「内部」で生じたものとは言い難い。しかしながら、先にも述べたように、会話を終了に向かわせることの提起はこの断片に至る以前になされており、ここで重要なのは、9行目の新たにトピックを挿入する発話のデザインにおいてもその志向性を確認できるということである。

まず、Hの9行目の発話「ああと一つ聞こうと思ってたんだけど:」の冒頭の「あ」は"OH"同様、その後に続く発話内容が、この時点で思い出されたことであることを主張している。「聞こうと思ってたんだけど:」という言い方も上の英語の例"*I did wanna tell you*"に非常に類似している。音声データを聞く限り、英語の例で示されているような有標的な強勢は確認できないが、「思ってた」という過去形の使用は、同様に、本来この時点で何か新しい事柄について聞くべきではないという認識を示していよう²⁰。「あと一つ」という言い方は、それが、新たな、しかし、自ら持ち出す最後のトピックであること、すなわち、これ以上「言いそびれたこと」はないことを主張している。これは、まさに前駆終結に対応する主張であり、逆に言えば、HはYによってすでに前駆終結が提示されたという理解を示している。

「あ」という間投詞とともに、その時点での想起を明示的に主張する言い方を用いることによって新たなトピックが持ち出される場合もある。次の断片を見てみよう。

(7) [就職]

1 B: きほんてー きほん::には、きほん、なに、きほん:は、

2 (0.5)

3 A: うん

4 B: 朝晩でという h こ h と h で hhh

5 (0.5)

6 A: hahahah, そうだね hhhh=

7 B: =よかったでしょうか。

8 (.)

9 A: .hh はいはい、よろしい [ですよ

- 10 B : [uhhhhhhhhh
 11 A : hahaha [hhh
 12 B : [とということで。はい。
 13 A : は : : : [い
 14 B : [ありがと : : :
 15 A : [うん。
 16 A : いえい [え, こちらこそ
 17 B : [う : : ん
 18 A : [うん
 19 B : [うん
 20 → A : [あ、ねえ > そうだ そうだ < [ね,
 21 B : [じゃあ [うん
 22 A : アンケート どうしよう。
 23 B : あ : : : , アンケート ?
 24 A : うん。
 25 B : ん : : : : : と、
 26 (1.0)
 27 A : 朝晩もしくは合宿でも平気 ?
 28 B : う [: : : ん
 29 A : [合宿持ってくるのはまずいかな

20行目のAの発話は「あ」で開始され、改めて受け手に呼びかけることによって（「ねえ」）新たなシークエンス開始を投射している。つまり、このターンの最初の部分は、後続部分が、先行ターンに対する何らかの反応として接合するターンではないということも投射している。しかし、話者は、その直後ではなく、まず「そうだそうだ」という語句を挿入し、さらにもう一度「ね」という呼びかけをやり直した後、22行目で投射された新たなトピックを開始している。「そうだそうだ」が幾分早口で言われており、その後にもう一度「ね」が言い直されていることから、「そうだそうだ」は自己修復によって挿入されたと見ることができる。つまり、敢えて、このときに思い出されたことであるという標識を用いているのである。それは、この時点でこのトピックを持ち出すことの「理由説明」でもあり、現時点で新しいトピックを持ち出すことにそうした理由説明が必要であること、すなわち、本来はそれが期待されない発話連鎖の位置にあるという理解を示している。この発話における「そうだそうだ」は、同時に、今「思い出されたこと」がそのような理解があるにもかかわらずここで挿入されるに足る内容・緊急性を持つことを主張しているように思われる。そうした強い

主張を伴わず、「あ」という標識のみで新たなトピックが導入される場合もある。

(8) [音楽]

- 1 Y: じゃ: すいませんでしたなんか hhh
- 2 K: はい、はい =
- 3 Y: = は [い
- 4 K: [はいはい。 [大丈夫です。
- 5 Y: [じゃあ、おー
- 6 (.)
- 7 Y: [また。 = あ (.) あした↑: (.) だっけ。
- 8 K: [° はい°。
- 9 (1.5)
- 10 Y: あの [シーディ -
- 11 K: [> あしたあしたあした<
- 12 Y: うん
- 13 K: うん
- 14 Y: じゃあ連絡ください。
- 15 K: は: : い
- 16 Y: はい
- 17 K: は: : い [それでは
- 18 Y: [じゃ: また、
- 19 Y: は: い
- 20 K: [ばいば: い
- 21 Y: [じゃ: ね: : : :
- 22 ((受話器を置く音))

5行目でYはKの発話と重なる形で「じゃあ、おー (.) また。」と最終交換を投射する発話を開始するが²¹、発話を打ち切り、「あ (.) あした↑: (.) だっけ。」と新たなトピックを挿入する。「あ」という想起の標識は、後続部分がこの電話においては初めて取り上げる事柄であることを示すが、「あ (.) あした↑: (.) だっけ。」という言い方は、この二人の会話者間ではそうした極端に省略された言い方でも了解される事柄であるという話者の認識を示している²²。(もっとも、9行目の沈黙によって受け手は必ずしもYの発話を即座に理解しなかったことが明らかになったため、Yは10行目で先の自分の発話の補足を開始するのであるが。ただし、11行目でKは先に開始されたYの発話が終わるのを待たずに早口で「> あしたあしたあした<」と確認を与え、そ

の必要がないことを主張する。Yの「あ（。）あした↑：（。）だっけ。」という言い方の正当性が保たれたわけである。）

いずれにしても、終結部もしくは会話の終了への志向が公然化されている時点で、その電話の会話で最初に言及されるトピックを導入する場合は、なんらかの誤置標識を伴うことによって、本来新しいトピックを導入する位置ではないという理解を示していることが確認できたと思う。

4. 「無標」で導入される新しい「トピック」

前節までは、会話の終了が志向されているという理解が、話者が遡及的に会話の趣旨に立ち返ったり、新たにトピックを導入するその仕方によって（その発話の受け手もわれわれ分析者も）確認でき、その会話者相互の状況確認を背景に次の発話連鎖が構築されていくことを見た。

しかしながら、本節では、すでに終結部が開始されたことに会話者双方が志向している中で新しいトピックが導入されているにもかかわらず、その発話が上に見たような標識を何ら伴っていない事例を取り上げる。例えば、次の断片を見てみよう。

(9) [落語]

- 1 C：[うん、そんなことなんですよ。]
- 2 E：[() [uhhhh
- 3 E：[ほんと。
- 4 C：[はい。 ええ、ええ。
- 5 E：わかりました：：：。
- 6 C：う：ん
- 7 E：[じゃ、あの：：：：そんなこと [で、
- 8 C：[hhhhh [うん
- 9 E：えーとまた（。）あの：：メールかなにかで [はっきりしたら=
- 10 C： [うん
- 11 C：=そうですね：[：
- 12 E： [うん、連絡しますの [で：
- 13 C： [あいはい。
- 14 E：ま、あんまりじゃ、もしかしたら期待（。）しないで
- 15 [待っててもらえば [ちょうどいいくらいか↑なって
- 16 C： [うん [あいはい。
- 17 C：うふ hhhん、[そhういうふうにしまhすhh。は [：い。

- 14 (0.5)
 15 A：は：い、わかりました：：。
 16 B：は：：い。
 17→A：ひろっぺ 今日 (.) あれだよ？
 18 B：[なに？
 19 A：[バレー
 20 (1.5)
 21 B：.hhh° はい？ °今日からだっけ？
 22 (.)
 23 A：[そうだよ。
 24 B：[あ：そうだね。
 25 (1.0)
 26 A：7時だよ
 27 B：は：い、じゃあみ：るわ。
 29 A：は：い (.) ehhhhhh.hhhh はいはいじゃ：ね。
 30 B：は：い [は：い、じゃ：：ね
 31 A： [なんか
 32 B：うん、ばいば：い。
 33 B：は：い。
 34 ((受話器を置く音))

A は友人と一緒に翌週 B のアパートへ遊びに行くことになっていたのだが、この電話は B が A とその友人が何時ごろに来るのかを確認するという目的でかけたものである。B はその日の午前中はすべきことがあることを伝え、A とその友人があまり早い時間から来ることに難色を示している。A はその趣旨を了解したことを 1 行目で示している。B の 4 行目の「じゃあ」が最初の前駆終結の開始と見られるが、A が同時に発した 5 行目の質問によって同じトピックの連鎖が拡張される。9 行目で再度終結部開始の提起が試みられ、10 行目の受諾によって終結部が開始する。ところが、17・19 行目、A によって新たなトピックが導入されている。この発話も、直前の発話と何ら関連付けされていない内容にもかかわらず、そのことが何らかの手段によって標示されているわけではない。

前節までの事例の記述は、会話者が、現時点が連鎖組織上どのような位置にあるかということについての理解を相互に示し、自らの発話構築に反映させていることを実証するものであった。「じゃ」や誤置標識はそうした理解の呈示を担う言語形式としてとらえることができた。ならば、上の (9) (10) の事例はどのようにとらえれば

よいのだろうか。

たまたまこれらの会話例の参加者はそうした志向性を示さなかったとして片付けるのは早計であろう。何よりも、当の発話の受け手がそうした標識の欠如を欠如として知覚しているような形跡はない。今後同様の事例をさらに集めて検証する必要があるが、(9)(10)のような事例についてどのような分析が可能かということについてひとつの見通しを呈示したいと思う。

会話は終結部では基本的に新しいトピックを持ち出すべきではないという規範へ志向しており、「じゃ」や誤置標識などの使用は規範に逸れる（と知覚される可能性のある）自分の行為の釈明でもある。つまり、「じゃ」を用いることによって、自分が今挿入するトピックは新しいトピックではなく、すでに話されたことの趣旨を確認しているものであるという釈明をし、「あ」を用いることによって、終結部で取えてその新しいトピックを挿入するのは、それをたった今思い出したからであるという釈明をしているわけである。終結部においてその会話で初めて言及する事柄を導入する際にそういった標識を使わないということは、一見規範を逸脱しているその行為は釈明を必要としない、つまり、実は、規範を逸脱しているのではないということをも主張していると考えることができる。すなわち、それは新しいトピックの提示ではない、という主張である。(9)の21行目も(10)の17行目も、直前部分とは断絶しており、また、その会話において初めて言及する内容であるのに、これは一体どういうことなのだろうか。

トピックが提示されれば、受け手がそれをトピックとして受け入れることによってそのトピックについての連鎖が展開していく。それゆえ、相互に了解しながら順番取りシステムを停止させる方向へ向かうことが優先される終結部において新たにトピックを導入することが有標化されるのである。つまり、トピックの提示はそのことについてある程度の長さの連鎖を展開させることを提起している。では、初めて言及する事柄を終結部で導入しながらも、特にそのことについて連鎖を展開することを提起しているわけではないことを示す場合にはどうすればよいだろうか。それには、それが新しい「トピック」であるという標識を取えて使わない、という方法があるのだ。それは、たとえ新しい事柄に言及していてもそれをトピックとして取り上げる必要はない（が、取り上げても構わない）という主張として認識される。終結部で取えて新しい事柄に言及しながら、そのことについて取り立てて話を展開することを提起するわけではないという状況というのはにわかには考えにくいかもしれないが、まずは、事例に戻ってみよう。(9)の21行目も(10)の17行目も受け手の関心事（と認識されうること）に言及している。相手の関心事を自分から取り上げることはそうしないよりも社会的に望ましいと知覚されるであろう。しかし、それを取えて自らトピックとして提起すべきではない、あるいは、その必要はないという場合も考えられるので

はないだろうか。相手の関心事を認識していることを示す行為そのものが重要であってそれをトピックとして取り上げるかどうかは相手に委ねるのが適切である場合は十分にありうる。例えば、(9)の21行目の発話のように、相手の配偶者が在宅中であるかどうかを尋ねること自体は、社会的には、例えば、相手を電話口に引き止めていることに対しての気遣い等を示すものとして受け止められるであろう。しかし、それをトピックとして展開する意図を示すことは、ネガティブなものも含めて様々な推測を引き起こすことになる。誤置標識等を配置せず、不意に「いま、きょう↑はご主人はいらっしゃるんです？」と尋ねるのは、それがトピックとして提示されているのではないことを主張しているのである。もっとも、Eの21行目の発話は質問として構成され、その質問に対するCの「うん？今ね：、あの：：(.)山のほうにお散歩に行ってます：。」という応答が、「なあに、山のほうって。」というEの反応を招き、それを契機に連鎖が展開する。しかし、このことは、反証にはならない。Cの応答「あの：：(.)山のほうにお散歩に行ってます：」における、「山のほう」という言い方は、例えば「ちょっとそこまで」という取って替えて特定化を避けていることを主張する言い方でもなく、かといって、受け手が何の疑問もなくその指示対象を特定できる言い方でもない。C自身がそれを認識していることが、構築中の発話を受け手に合わせたデザインすることが困難であることを公然化し、標示する「あの：：」によって示されている(西阪、1999)。Cの応答のデザインは、それが十分な応答となっていないというC自身の認識を標示しており、そのような応答を受けた質問者のEがここでCの応答について修復を求める反応をすることはむしろ適切である。

終結部において「無標」で新しい事柄を導入する発話が、新たなトピックとして提示されていないことを示す例をもう一つ見ておこう。

(11) [講習会]

- 1 C := うん、.hh [そんなことで。
- 2 D : [はい、
- 3 D : あ、はい、わかーhじゃあ：：°え：つと°はい、わかhりましたhhh
- 4 じゃあ連絡しておきます：：。
- 5 C : あ：すいませ：[ん。
- 6 D : [はい。
- 7 C : う [ん。
- 8 D : [どうもあり [がとうございました：
- 9 C : [よろしくおねがいしま [す：
- 10 D : [は：：い=
- 11 → C : =どくしょはね：

- 12 D : はい =
 13 C : =あれだったけど (.) いい↑ねそのかたはね、[なくてもね？
 14 D : [そうですね。 =
 15 C : =うん。 .hh はい
 16 (0.7)
 17 C : じゃよろしく [お願いします : :
 18 D : [は : い、ありがとうございます。 [° どうも失礼します °
 19 C : [は : : い、 (° どうも °)
 20 °失礼します : : °。
 21 ((受話器を置く音))

(11) は、Cが所属している主婦のサークルにDが自分の友人と共に新しく参加することになり、Cがそのサークルで開催している講習会に持参すべきもの等を伝える電話の終結部である。11・13行目でCは突然サークルの別の活動（本の読み聞かせ）について言及し始めるが、「あれだったけど」と十分に特定しないままに「いい↑ねそのかたはね、なくてもね」と続けている。「そのかた」というのはDの友人を指し、その友人に関しては読み聞かせの活動については「いいね」「なくてもね」と言っているのである。何がなくても良いのか（私には）不明であるが、それをトピックとして取り上げる必要が無いことを主張しているデザインであるのは明らかであろう。Dもその主張を受け入れ、電話は終結に向かう。

5. 社会的実践としての「終結部」

会話の終了は、会話者のどちらかが一方的に会話を打ち切るという事態を避けて、協同で会話を終了させるために、お互いにそれ以上「言いたいこと」[言いそびれたこと]がないということを確認し合いながら、もしまだ「言いたいこと／言うべきこと」があるのならそれを言う機会を与え合いながら達成される。このような過程において、遡及的に会話の趣旨に言及したり、トピックを導入する発話がどのように組織されているかを見てきた。会話の終了に向かうことが適切であると認識される場や終結部においては、基本的に、新しいトピックを導入せず、しかし、「言いそびれたこと」を持ち出す機会を確保しつつ、会話を終了させるための最終交換に至ることが志向されていることを確認した。具体的には、日本語の特定の言語形式（「じゃ」や「あ」など）が標識として使用されること／されないことが、そうした志向性の公然化に関わっていることを見た。

会話の終了は自然に訪れるわけでも、一定の予め決まった手続きによって実現されるわけでもなく、局所的に「今・ここで」起こっていることの意味を相互に確認しな

がら協同で実践され達成される事態である。規範に沿うことや逸脱することによって公然化された志向性は状況の理解を相互に局所的に確認する機会ともなり、協同で適切に会話を終了するという実践をより確実なものとしているのである。

日常会話の研究において、会話の中で生じることに最初から「瑣末なこと」や「無駄」として排除するべきものはない。すべて、会話の当事者が個々の具体的な文脈において社会的実践としての会話を組織する資源として利用している可能性を探る価値がある。「あ」や「じゃ」などを用いることが、あるいは用いないことが、現前の社会的相互行為状況の理解を確認し合い、間主観性を維持する装置となっていることは、会話の中の「瑣末」な声を拾い上げ、丹念に調べることによって初めて可能となったのである。

注

¹ 本稿の査読者には大変貴重なコメントを頂いた。また、本研究で使用したデータの多くは2003年度社会言語学演習の受講生によって収集されたものである。記して感謝したい。

² 制度的な場面も基本的には相互行為として成立している。その意味では、日常会話と制度的場面のやりとりには本質的な違いがあるという前提自体、議論の余地がある。それらはむしろ連続体として我々の言語活動全体を構成しているといえよう。いずれにしても、日常会話が基盤となっていることは間違いない。

³ 社会学者である彼らが創始した会話分析の焦点は言語構造や言語使用の解明にあるわけではなく、人々が言語を含めた様々な資源を利用していかに関話という活動を組織しているかということにある。Sacksたちの研究成果は日本語における会話の組織の研究にも計り知れない知見と洞察を与えている。とはいえ、日本語における会話の組織のされ方が英語の会話と全く同じであることを前提として英語の会話分析の知見をそのまま日本語会話に適用することについては常に慎重であるべきだろう。英語会話の分析においてその強力が証明されている概念を、真に日本語会話の分析に有用な道具として彫琢する作業が急がれる。

⁴ 本稿では、分析対象について、話者交替が繰り返されることによって構築されていく発話連鎖組織上のある位置を占める発話として捉えている際に「順番」、その順番において産出される発話（の構成など）が問題となる場合に「ターン」という言い方を用いているが、事象としては同じものを指している。表現の使い分けは、単純に、従来の言語学的・談話分析的研究における一般的な使用から喚起されるイメージを考慮してのことに過ぎず、理論的な主張は含まれない。

⁵ つまり、Sacksらが提示した順番取りシステムの「モデル」は、研究者が構築した仮説や傾向ではなく、膨大なデータの詳細な観察に基づいて、会話者が協同で順番をスムーズに交替する実践を、出来る限り精確に、かつ、特定のコンテキストに縛られないレベルで記述したものである。ここでは本稿に関連のある部分を中心に極めて雑駁に概要を述べているに過ぎないため（実際その「モデル」の内容自体はここでは触れていない）、正（精）確な理解のためにはSacks et al. (1974) を参考されたい。

⁶ 従って、順番の移行が適切となる時点（すなわち一つの順番の完結点）は、もちろん、言語構造上の単位（単語、句、節、文）を重要な資源として組織されてはいるが、順番は本質的に「相互行為」の順番であるため、必ずしも統語的に分類されている単位とは一致しない。例えば次のようなやり取りにおいて、4行目、7行目の言語構造上の単位は何なのか、従来の言語学における文法単位の用語では記述することができない。

- 1 D: あのジャルとか(ま)アナとか?
- 2 (.)
- 3 M: うん。
- 4 D: [だと ::]
- 5 M: [> 全日空?<]
- 6 D: うん。
- 7 M: はあるの?
- 8 D: 微妙ね。

⁷ ある研究会の場での西阪仰氏の発言に示唆を得たものである。

⁸ 現時点では「じゃ」と語末の母音が引き伸ばされた「じゃあ」を区別していない。

⁹ Schegloff and Sacks (1973) では電話の後の再会や再接触について調整を図ること (making arrangements) は終結部に含まれうるとし、前駆終結の例としては特に取り上げていないが、日本語では O.K. のように発話連鎖上適切に配置されれば特定の「前駆終結」として働く表現が用意されていないとすれば、英語に比べてより多様な内容の発話が前駆終結としてデザインされ利用されていると考えることが出来る。ここでの再接触の申し出も前駆終結としてデザインされている発話である。そのデザインのされ方について、特に、発話の最初の部分にある「じゃ」については、3.2. で詳しく論じる。

¹⁰ 熊取谷 (1992) では Schegloff and Sacks (1973) を引用した上で、pre-closing を「前段終結」、terminal exchange を「最終発話交換」としている。本稿ではそれぞれ「前駆終結」、「最終交換」と呼んでいる。

¹¹ 原典では縦書きだが、それ以外は、原典の表記法に従う。

¹² ついでながら、「今週末あいてる?」に対して、それが依頼もしくは誘いの先行拡張であるという理解に基づいて「今週末はちょっといろいろ入ってて」という返答をすれば、それに対して「じゃいいや。」といった反応が為され、予測された依頼もしくは誘いの基本連鎖は結局生じないこともありうる。それでも「今週末あいてる?」は、依頼／誘いに先行するものとして組織されまたそのように理解される限りにおいて、「先行拡張」である。

¹³ 熊取谷 (1992) は A1-B1-A2 のやりとりが、その後「継続可能」であるとしているが、単に A2 を受けて何らかの発話を続けることができるのか、A2 の発話に対する反応をするために B が次の発話順番を取ることが適切である (relevant) とみなされる状況であるのかを区別するべきであり、ここでは、前者がより正確な記述であると思われる。すなわち、A2 の後にそれを受けて B が何かを言うことは可能ではあるが、別に A2 の反応としてデザインされた発話でなくともよいし、この後 A 自身が続けたとしても不自然ではない。また、同論文では、この発話があるため A1-B1-A2 が隣接対を形成していないと判断してある。しかしながら、連鎖組織上、A1 と B1 は隣接対を成し、A2 は A1 で開始された行為連鎖を「閉じる」ように構成された「第三成分」である。第一成分が産出されるとその受け手は第二成分を開始することが適切であるという期待があるのに対し、第三成分にはそのような強い規範性はない。(その意味でも、行為連鎖の最小単位は隣接対である。)

¹⁴ これは、熊取谷 (1992) の「じゃ」は「現行発話交換を中断させ新たな発話交換を先導する力を持つ」という観察と一部重なるが、「じゃ」自体にそのような「力」があるとするのは、正確ではない。このような位置で用いられる「じゃ」は、そうした直前の発話との断絶を標示することによって、聞き手に対して現ターンの適切な解釈を導いていると同時に、そのような発話連鎖上断絶した発話をするのが許される位置にあるという話者の理解を提示している。

¹⁵ その意味では、後に説明するように、すでに最初の前駆終結が提起された後に生じているわけだが、少なくともこの部分において、「祝儀の額」というトピックについての話は継続しており、終結部に入る作業は一旦保留されている。

¹⁶ 前駆終結 (pre-closing) とその受諾を、独立した隣接対ではなく、最終交換を基本連鎖とする先行拡張とする考え方もありうる。しかしながら、前駆終結によって開始されるのは特定の基本連鎖を指向して組織されていく先行連鎖ではなく、終結である。終結部は基本的に会話者がそれ以上話することがないということを確認し合う場であるゆえ、新たなトピックを持ち出さずに順番をパスし、相手に順番を譲っていることを示すために順番が費やされるという事態が生じる。そのため、複数の独立した隣接対が並列することが多い。一方、そうした順番をパスするための順番の次の位置は、新たなトピックの導入は何らかの形で先行ターンに関連付けるべきであるという一般的な規範に縛られることなく新たなトピックを導入することができる。こうしたことから、前駆終結は先行連鎖とは区別されるべきであろう。

¹⁷ トランスクリプト上の1行目から8行目まで1分半強。

¹⁸ 招待状は来ていないという母親の返事に対するHの19行目の反応は、これ以上このトピックを続けることはしないことを冗談めいた言い方で強調している。このことについてここで詳細に立ち入ることはしないが、教員採用試験の直前に問題集を探すように依頼したことについて、母親が「あんたこんなもん今何をゆつとりゃ:いね」と非難をし、記念式典の開催日が採用試験期間中なので招待状が来ていたとしても「いけんわいどうせ」と指摘したことと無関係ではないだろう。

¹⁹ Yは「じゃ:hh あと:() なし:::やさんに行ってきたら:::連絡くれる?」という発話の後、Hに対して「おいしいサトイモ」のおすそ分けを申し出ている。次に二人が会う機会は、HがYに買って来た梨を渡し、YがHにサトイモを渡す機会でもあるという意味において、次に会う機会の日時を決めることは「自然な」流れとして了解されよう。

²⁰ Schegloff and Sacks (1973) では contrast marking という用語が用いられているのは前述のとおりだが、少なくとも日本語の事例(6)における過去形の使用に限って言えば、その時点で新たなトピックを導入することがもはや「遅きに失する」ことであるという認識を示していると考えの方が自然ではないだろうか。終結部は新たなトピックを導入する場ではないという認識を示していることにはかわりはないが。

²¹ 特に「じゃあ」に続く「また。」は、最終交換の第一成分として用いられている「また」であることが非常に強く示唆されているように思われる。また、音声データからもそのように聞こえる。「お-」は何かを言いかけて打ち切ったようであるが、この部分がKの発話と重なっていることと無関係ではなからう。つまり、一度に二人以上が話している事態をできるだけ早く収束する手だてとして発話を打ち切ったと言える。発話の重なりは当然Kにも認識されており、双方が一瞬互いに順番を譲った結果として6行目の沈黙が生じたと考えられる。二人が次の順番を同時に開始したため、結果としてさらなる発話の重なりが生じてしまったのであるが。(7行目と8行目)

²² 「あ」によって導かれる部分がここで初めて取り上げられる事柄であるように聞こえるにしても、ここで初めてとりあげる「トピック」であるということは、この断片からのみではわかりにくいかもしれないが、事実として、ここで言及されている事柄と関連付けられるような内容のトピックはこの断片以前の部分で一切取り上げられていない。

参考文献

- 羽井佐昭彦, 1999. 「感謝表現の対照研究 -- 依頼目的の電話会話終結部を分析して」『東北工業大学紀要Ⅱ人文社会科学編』19: 47-58
- 熊取谷哲夫, 1992. 「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』11-9: 14-25. 明治書院
- 西阪仰, 1999. 「会話分析の練習」 好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』世界思想社. 71-100.

- 岡本能里子 . 1990. 「電話による会話終結の研究」『日本語教育』 72: 145-159. 日本語教育学会
- 岡本能里子・吉野文 . 1997. 「電話会話における談話管理－日本語母語話者と日本語非母語話者の相互行為の比較分析－」『世界の日本語教育』 7: 45-59.
- 小野寺典子 . 1992. 「エスノメソドロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応用」『日本語学』 11-9: 26-38. 明治書院
- Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson. 1974. "A simplest systematic for the organization of turn-taking for conversation". *Language*, 50. 696-735.
- Schegloff, Emanuel A. 1972. Sequencing in Conversational Openings. In J. Gumperz and D. Hymes, eds. *Directions in Sociolinguistics: the Ethnography of Communication*. New York: Holt, Rinehart and Winston. 346-380.
- Schegloff, Emanuel A. 1995. Sequence Organization. ms. University of California, Los Angeles.
- Schegloff, Emanuel A. and Harvey Sacks. 1973. "Opening up closings". In *Semiotica*, 7: 289-327.

付記：トランスクリプトに用いられている記号
トランスクリプトの表記法は Gail Jefferson によって開発された転写システムに基づいている。

[発話の重なり
=	2つの発話が密着している
()	聞き取り不可能
(はい)	聞き取りが不確か
(1.0)	間合いの長さ (秒)
(.)	0.2 秒以下の短い間合い
::	音の引き伸ばし
よ -	言葉が不完全なまま途切れている
h	呼気音
.h	吸気音
<u>そう</u>	音が通常より高くなっている
°えっと°	音が極端に弱くなっている
。	語尾の音が下がっていて発話が終了したように聞こえる
、	語尾の音が少し下がっているが「。」ほどには下がっていない
?	語尾の音が上がっている
↑	音調が極端に上がっている
↓	音調が極端に下がっている
> <	発話のスピードが目立って速くなっている
< >	発話のスピードが目立って遅くなっている
(())	注記